

現代型仏壇の研究開発

デザイン・工芸部 藤田 純一，恵原 要

1. はじめに

昨年度までに開発を行った新設計・製造システムを用いる事で、仏壇の設計・製造工程での効率化・高度化が図られ、仏壇をより早く作る体制は整った。しかし現在、海外からの輸入仏壇は京型金仏壇を中心として更に増加している。この状況を打破する為には輸入仏壇と競合しない新しい商品に生産の主力を移していく必要がある。しかし川辺産地では、新しいデザインの仏壇の試作開発は今まで多少は行ってきているが、ほとんど京型金仏壇のみを生産してきており、全く新しい仏壇を企画・開発していく新商品開発力が不足している。

そこで本研究では、研究会を組織して新商品開発における研修を実施していくと共に、他の産地には無い「新設計システム」や「レーザ加工システム」などの特徴を最大限に活用した、全く新しい仏壇を試作・開発することで、川辺産地の新商品開発力を強化することを目的とする。



図1 京型金仏壇

2. ターゲットとコンセプトの決定

新しい商品の開発にあたっては、多種多様なニーズが想定される関東方面の市場をターゲットとした。同地域は現在、木目を活かした家具調の「東京唐木仏壇」が主流ではあるが、新しい仏壇デザインの試みが複数のメーカーから成されており、市場として今後非常に有望である。また東京には、地方出身者が多数在住しており地方仏壇の雰囲気をも望む声も高い。

デザインのコンセプトとしては、現代の住環境や生活文化に適した仏壇「現代型仏壇」を商品化することとし、イメージスケール手法を用いて新商品のポジショニングを決定した。同地域の仏壇市場にはまだニッチな隙間がある考えられる。



図2 イメージスケール作業風景

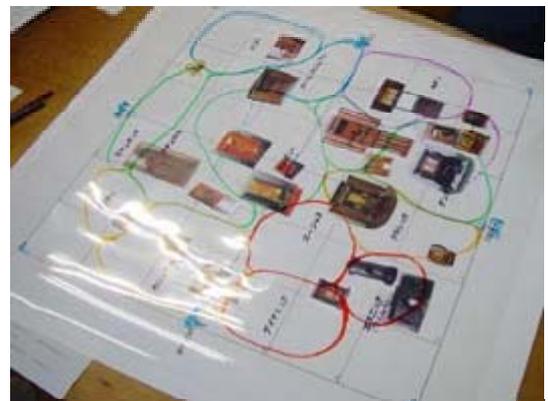


図3 イメージマッピング結果

3. デザイン開発

コンセプトが決定したら、次はラフスケッチの作成である。今回の研究会には、スケッチ描きなどには不慣れな方々も参加されていたが、ラフはデザイン作業の重要な工程の1つということで、各自確実に作業を行ってもらった。またラフスケッチ実習の後、図面化の作業を行ったが、図面描きの基礎から研修を始めた事により、後の工程の作業者に解りやすい描き方を理解してもらった。その後、ラフスケッチと図面を元に、デザイン上の試行錯誤や試作上の問題点抽出を数回行った後、試作に取りかかった。



図4 スケッチ描きの研修風景

4. 結果および考察

試作完了品は以下の2案である。いずれも卓上式のお祈りグッズで、各部品は分離式になっており、部品を取り替える事で様々な宗派や無宗派にも対応できる。ここまでの関連資料を、東京の代表的な仏壇販売関連の方々に見て貰い評価を受けた。代表的な意見としては、デザインを更にシンプルにしなければならない点と、金箔の使い過ぎなどであった。



図5 試作品A

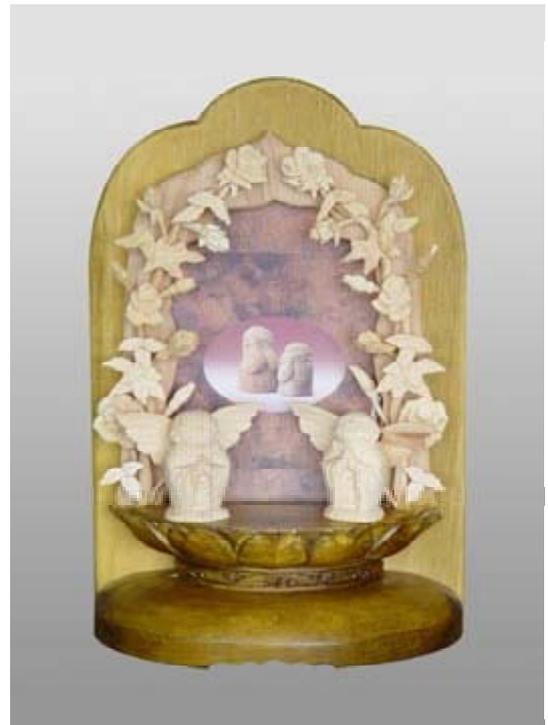


図6 試作品B

5. おわりに

東京での評価内容には重要なキーワードが多数あり、今後の商品開発において非常に役立つと思われる。今後も引き続き、新商品開発における企画やデザイン開発に関する支援を行っていく予定である。またそれと併せて新型仏壇の販路開拓にも留意していきたい。